

上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト

— インフォーマルスタイルに着目して —

岡崎 渉

(2015年10月5日受理)

Style Shift to Plain Form in Advanced Learners of Japanese:
Focusing on Informal-Style

Wataru Okazaki

Abstract: This paper investigates the usage of informal-style (IF) by advanced learners of Japanese as a second language when they shift from a formal (polite) speech style into an informal (plain) version. The data consists of fifteen dyads between native and non-native speakers who meet for the first time. The results show there was negligible difference in the plain form usage between learners and native speakers, but the learners used IF proportionally more than native speakers. The analysis of sentence final particles, rising intonation, and WH-questions in the learners' IF forms revealed that the learners' use of plain forms became IF in the following two occasions: First, the learners expressed a spontaneous emotional reaction, and the plain form was accompanied by the particle YO, NE, or rising intonation. Second, they used rising intonation but did not use self-monitoring discourse markers in monologues.

Key words: advanced learners of Japanese, plain form, informal style, speech style, style shift

キーワード: 上級日本語学習者, 普通体, インフォーマルスタイル, スピーチスタイル, スタイルシフト

1. 普通体における二つのスピーチスタイル

日本語には丁寧体, 普通体というスタイルの区別があり, 相手や場面などにより使い分けられている。だが, 目上の者や初対面の者と話すときといった, 丁寧体使用が求められる会話であっても, 普通体へのスタイルシフト(以下, シフト)が起こる。シフトは従来, 多くの先行研究により, 相手との心理的距離や会話のフォーマリテイの調整, あるいは談話展開に関わる機能など, さまざまな役割を果たすことが

明らかにされている(生田・井出, 1983; 三牧, 1993, 1997, 2000, 2002; 宇佐美, 1995, 2001; Okamoto, 1999; Makino, 2002; Megumi, 2002; Cook, 2002, 2008a, b; 陳, 2003; 伊集院, 2004; 申, 2007; ナズキアン, 2007; Ikuta, 2008; Saito, 2010, 等)。また, 母語話者は同じ普通体であっても, インフォーマルスタイル(IF)とインパーソナルスタイル(IP)を使い分けていることが指摘されている(Cook, 2002)。

IFは以下のような普通体発話を指す。

例(1) Cook (2002) より引用

【家族内会話】

01 H: 何が一番おもしろかった?

02 T: さっき話したよ。

03 H: でれーとしてね, ぶんなくっても怒んな

04 いの。

本論文は, 課程博士候補論文を構成する論文の一部として, 以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員: 畑佐由紀子(主任指導教員), 白川博之,
柳澤浩哉, 深澤清治, 永田良太

例(1)で用いられている普通体発話からは、会話参加者同士が心理的に近い関係であることが想像できる。これらの普通体発話はIFに該当するが、その形態的特徴としてCook(2002)では、文末の上昇音調(01行目)や、「よ」(02行目)、「の」(04行目)などの終助詞といった affect key との共起が挙げられている。IFは聞き手目当ての発話であり、目上の者や疎の関係の者に対しては使用に制約がかかる。

一方、IPは話し手の意識が、聞き手よりも話し手自身や発話の情報内容に向けられる。例えば、以下のような普通体発話を指す。

例(2) Cook(2002)より引用

【焼き鳥屋で来店客がインタビューを受けている】

(I: インタビュアー, C2: 客)

01 I: あの、焼き鳥の魅力はどういうところですか?

02 C2: あ、やっぱり安くておいしいんで、おいしいから。

05→I: 安くておいしい。

01-02行目でインタビュアーは客に対して丁寧体で質問を行っているが、03-04行目の客の答えに対する05行目の反応では、「安くておいしい」と普通体へシフトしている。IPに当たるこの発話は、IFのように聞き手と心理的に近い関係であることを表しているわけではない。例におけるIPについてCookは、客の応答を要約したものであり、発話の情報内容に意識が向けられているとしている。IPは、聞き手に向けられた発話ではないため、丁寧体使用が求められる状況での会話であっても使うことができる。

以上のように、普通体は通常一つの文末スタイルとして扱われるが、実際の会話においては、相手との関係や場面などに応じてIF/IPが区別されているのである。

では、日本語学習者(以下、学習者)の場合はどうだろうか。大半の日本語教科書において普通体は、丁寧体と対立する一つのスタイルとして記述されており(Cook, 2008a; 今村, 2014)、IF/IPのような区別には言及されていない。学習者が丁寧体と普通体をどのように使い分けているのかについての調査は多くなされているものの、IF/IPを区別した使用実態調査はほとんどなされていない。目上の相手や疎の関係の相手と話す場合、IFは失礼な発話になりやすいため、IF/IPを区別することは、日本語学習者にとっても重要な問題であろう。そこで本研究では、丁寧体基調の会話においてシフトされる普通体発話の中でも、相手

に失礼な印象を与えやすいIFに焦点を当て、学習者の使用実態を調査する。

2. 先行研究

2.1 母語話者のスタイルシフト

丁寧体、普通体というスタイルは、一般的に相手や場面などに応じて使い分けられるものとされている。だが、実際の会話においてスタイルはしばしば混用される。特に、丁寧体基調の会話における普通体へのシフトに関しては、生田・井出(1983)で取り上げられて以来、多くの研究がなされてきた(三牧, 1993, 1997, 2000, 2002; 宇佐美, 1995, 2001; Okamoto, 1999; Makino, 2002; Megumi, 2002; 陳, 2003; 伊集院, 2004; 申, 2007; ナズキアン, 2007; Cook, 2008b; Ikuta, 2008; Saito, 2010, 等)。一連の研究によると、シフトは、即時的な感情表出(例:「すごい」「かわいい」)や回想などの独話的発話を行うとき(生田・井出, 1983; 三牧, 2000; Okamoto, 1999, 等)、従属的・補足的な発話や背景情報を提示するとき(Makino, 2002; Megumi, 2002; Ikuta, 2008, 等)などに起こる傾向があるという。これらの状況における発話は、質問(情報要求)や応答といった発話とは異なり、聞き手に直接当てる必要がないという点で共通している。

では、シフトされる普通体について、形態的にはどのような特徴があるのだろうか。Maynard(1991)は、終助詞などの話し手の発話態度を表す要素が付加されている普通体と、付加されていない裸の普通体を区別し、後者の特徴を丁寧体と比較しつつ考察している。Maynardによると、丁寧体が聞き手に対して強い意識が向けられていることを表すのに対し、裸の普通体は聞き手に対する意識が希薄であることを表すという。例えば「これおいしいよ」という発話は聞き手に当てられており、話し手の発話態度が表されるが、「これおいしい」という発話は、特に聞き手の存在が意識されているわけではないという。

Maynardを踏まえCook(2002)は、普通体は聞き手への情意を表すインフォーマルスタイル(IF)と、発話の情報内容への焦点化を行うインフォーマルスタイルに分けられることを指摘し、それぞれの特徴を挙げている。IFは、「ね/よ/の/な」といった終助詞、上昇音調といった、聞き手に対する情意を表す要素と共起し、聞き手との心理的距離の近接を表すことができる。IPには主に裸の普通体が用いられ、発話の情報内容へ意識が向けられていることを表すとした。IPに当たる普通体についてSaito(2010)は、会社で上司と話すときに部下が用いる普通体へのシフトを調査

した。その結果、普通体はCook (2002) の言うように情報内容への焦点化を表す場合に加え、自身の考えの主張や独話的発話といった、内的思考の表出であることを表す場合が観察された。Maynardをはじめとする研究から、丁寧体基調の会話においてシフトされる発話は、普通体であっても、聞き手目当てにならないような形態的、音声的特徴であることがうかがえる。

以上のことから、普通体へのシフトは自由になされるわけではなく、聞き手目当て性をもたない普通体、即ちIPとして理解されるような発話環境、形態的・音声的特徴で発話される傾向があるといえる。母語話者は普段、同じ普通体という文末形式であっても、IF/IPを区別して用いていることがうかがえる。

2.2 学習者のスタイルシフト

では、日本語学習者はスタイルをどのように使い分けているのだろうか。スタイルの適切な使い分けは、教室での学習だけで習得するのは困難であることが指摘されており (Cook, 2001), JFL (外国語としての日本語) の学習者に関しては、日本滞在がその習得を促進するかどうかが関心を集めてきた (Marriott, 1995; McMeekin, 2006, 2014; Caltabiano, 2008; Iwasaki, 2008, 2010, 等)。一連の研究では概ね、専ら丁寧体を用いていた学習者が日本への留学を経て、必ずしも母語話者同様ではないものの、普通体へのシフトが見られるようになったことが報告されている。例えばIwasaki (2008) は、中～上級学習者5名による1年の留学前後のOPI (Oral Proficiency Interview) ⁽¹⁾ におけるスタイル運用を比較している。5名の内、3名は即時的な感情表出や独話的発話、背景情報を表す発話でのシフトが増加、2名は普通体を多用するようになったが、テスターである教師に依頼を行うときなど、特に敬意を表す必要のあるときに丁寧体を使う傾向があったことなどから、スタイルの理解が促進されたと結論づけられている。McMeekin (2014) は中～上級学習者の5～8週間の日本滞在中におけるホストファミリーとの会話を調査したところ、ホストファミリーとのやりとりを通して、規則的な普通体使用が増加したとしている。これらの調査からは、学習者は母語話者とのやりとりを通して、スタイルの理解が促されることが示唆されている。

しかしながら、これらの研究では、学習者がどのような発話環境で普通体へのシフトを行うようになったかという点に主眼が置かれており、相手との関係を考慮した上で、適切なシフトであるかどうかという点にはあまり言及されていない。対人関係を考慮した適切さという観点をういた研究として、増田(2010)がある。増田は、中級学習者6名による教師との会話を、IF、

IPを分類して母語話者と使用頻度を比較している。その結果、学習者は母語話者と比べ、IFが少なく独話的発話が多かった⁽²⁾。また、留学未経験者はほとんど普通体を用いなかった。データに用いられた会話相手が、互いによく知った間柄の教師であることを考えると、IFが少なく、シフトの多くは独話的発話であったことは適切であると言える。だが、McMeekin (2014) が示唆しているように、普通体は裸の形式からより複雑な形式へと発達していく。増田で対象とされた学習者は、そもそもIFを使える段階に達していなかった可能性が考えられる。

では、さらに学習が進んでいるであろう国内の上級学習者はどうだろうか。JSL (第二言語としての日本語) の上級学習者と、母語話者による初対面の接触場面会話を見た研究 (伊集院, 2004; 三牧, 2007; 申, 2009, 等) では、主にスタイルの使用比率や生起環境別のシフト頻度という点から、母語話者に近いスタイル運用が行われていることが示されている。しかしながら、これらの研究では普通体を一つのカテゴリーとして見なしている点で問題がある。上述したように、母語話者はシフトを行う際、普通体発話がIFにならないよう、IPとして理解されるよう用いている。そのような区別を、目標言語環境における学習者は、自然と身につけていくのかどうかを検討する必要がある。

2.3 本研究の目的

以上のことから、本研究では、日本語学習者の中でも、JSL上級学習者を対象に、丁寧体基調の会話においてシフトされる普通体発話には、母語話者同様、主にIPが用いられ、IFの使用は控えられているかどうか、IFが使われている場合、どのような特徴をもっているかを検討する。それにより、スタイル運用における、学習者のコミュニケーション上の問題点を明らかにする。

3. データ

3.1 調査参加者

調査に参加した日本語学習者は、日本在住のさまざまな言語を母語とする上級日本語学習者15名であった。本研究では、学習者によるスタイル運用の実態を調査することが目的であるため、母語の統制は行わなかった。15名の内、男性5名、女性10名、年齢の分布は21歳から30歳であり、平均25.5歳、全員が大学または大学院の学生であった。日本語能力試験N1 (1級) を取得していない者が4名いたが (L08, L10, L11, L12)、4名とも4年以上の学習歴があり、普段大学

や大学院での日本語による授業にも参加していたことから、上級に相当すると判断した。日本滞在歴は、5名(L01, L03, L04, L05, L08)が4ヶ月～6ヶ月、3名(L06, L10, L11)が6ヶ月～1年、7名(L02, L07, L09, L12, L13, L14, L15)が1年以上であった。

会話相手となる日本語母語話者には11名の協力を得た。男性7名、女性4名であり、年齢の分布は22歳から29歳であり、平均25.4歳、全員が大学院生であった。

3.2 会話データ採集

学習者が意図してIFの使用を控えているかどうかを検討するためには、丁寧体使用が求められるような改まった場面であり、一方でIPへのシフトは行える程度のカジュアルさもあることが望ましい。よって本研究では、初対面の、同年代の者同士による雑談をデータに用いることとした。データの概要を表1に示す。

調査参加者は学習者が15名、母語話者が11名で、母語話者は2つの会話に参加した者が2名(J01, J08)、3つの会話に参加した者が1名(J06)いた。大学内の一室にて両者を引き合わせた後、内容は何でもかまわないので自由に話し、15分経過したら室外で待っている調査者を呼ぶよう指示、録音を開始した後、調査者は退室した。会話データ計15本を採集、平均会話時間は約19分であった。なお、録音した会話データはすべて文字化した上で、分析を行った。

表1 会話データ概要

会話 No. (会話時間:分)	学習者 (性・年齢・母語)	母語話者 (性・年齢)
01 (16)	L01 (女・23・中国語)	J01(女・22)
02 (21)	L02 (男・25・中国語)	J02(男・27)
03 (21)	L03 (男・22・中国語)	J01(女・22)
04 (15)	L04 (女・25・中国語)	J03(男・27)
05 (14)	L05 (女・23・中国語)	J04(女・24)
06 (15)	L06 (女・25・中国語)	J05(女・25)
07 (17)	L07 (女・30・中国語)	J06(女・28)
08 (32)	L08 (男・23・インドネシア語)	J07(男・24)
09 (22)	L09 (女・28・インドネシア語)	J08(男・29)
10 (16)	L10 (女・21・インドネシア語)	J09(男・23)
11 (15)	L11 (女・28・ベルシャ語)	J06(女・28)
12 (17)	L12 (男・26・トルコ語)	J10(女・25)
13 (14)	L13 (男・28・フランス語)	J06(女・28)
14 (19)	L14 (女・25・ヒンディー語)	J11(男・25)
15 (26)	L15 (女・30・スペイン語)	J08(男・29)

4. スタイルの定義とIFの抽出、分類

スタイルのコーディングを行うにあたり、各発話を「丁寧体」「普通体」「その他」に分類した。

丁寧体：文末ないし主節に「デス／マス」が用いられている発話、または明示的な質問に回答する際の「はい」とする。

普通体：文末ないし主節に「デス／マス」が用いられていない発話、または明示的な質問に回答する際の「んー／うん」「そう」とする。一語文も含む。

その他：述部や主節が省略された「中途終了型発話」(宇佐美, 1995)、つまり言い切られていない発話である。

「はい／んー(うん)」「そう」は、相づちとしても頻繁に用いられることから、他の発話と対等には扱えないと判断し、明示的な質問(情報要求)への回答に用いられた場合のみスタイルを認定した。また、「ケド／カラ／シ」といった接続助詞で終えられている発話は、内容的には完結した発話と見なすことができるため(白川, 2009)、接続助詞の直前のスタイルにより丁寧体か普通体に分類した。対立するスタイルをもたない発話(「はじめまして」「なるほど」等)については、スタイル認定を行わなかった。

続いて、普通体発話の中からIFを抽出し、その他の普通体発話をIPとした⁹⁾。本研究におけるIFは、聞き手目当てであり、聞き手と心理的距離が近いことを表す普通体発話である。IPは、話し手の意識が聞き手よりも、発話自体あるいは話し手自身に向けられている普通体発話である。IFを抽出する上での基準としては、Cook(2002)を参考に、終助詞「ね」「よ」「よね」「の」が付加されている発話、文末が上昇音調である発話とした。加えて、文末が上昇音調でない裸の普通体であっても、疑問詞が用いられている疑問文(例:「どうだった」「何回見た」)は、明確に聞き手目当てであることがわかるためIFとした。

但し、相手発話の繰り返しや言い換えによる修復開始、確認要求・明確化要求といった発話は、談話のメインラインから外れた背景化された発話であることをシグナルする(Ikuta, 2008)。そのため、文末が上昇音調であっても、話し手の意識は聞き手よりも発話内容に向いていると考えられることから、IFとは認定しなかった。例えば以下のような場合である。

例 (3) 会話 No.03

- 01 L03: でもこの給料が、ほんとに高い。
02→ J01: 高い?
03 L03: 高いですね。

J01による「高い?」は、直前のL03による発話の一部を繰り返したものであり、確認要求として機能する。このようなシフトは丁寧体基調の会話でも用いられるものであり(宇佐美, 1995; Ikuta, 2008, 等), 話し手の意識は聞き手よりも発話内容に向けられているものと考えられる。

スタイルのコーディング及びIFの抽出にあたっては、筆者を含めた2名各自が、上記の定義に従い、全会話データの約10% (15~2本分) を対象に、文字化データ及び音声データを参照しながら実施、両者間の一致率を算出した。その結果、スタイルのコーディングは86% (305/356発話)、IFの抽出は87% (普通体180発話中、20/23発話) が一致したため、定義の信頼性は確保されていると判断し、残りのデータについては筆者のみで行った。

5. 分析

5.1 IFの使用傾向

各話者のスタイル使用回数及び使用比率を算出した結果、15本中12本の会話で普通体より丁寧体のほうが多く用いられていた。学習者L13と、2本の会話に参加したJ08は普通体のほうを多く用いていた。本研究では、丁寧体基調の会話において、使用に制約が生じるIFを見るため、この2名が参加している会話3本(会話No.09, 13, 15)は、本研究の分析から除外した。

12本の会話における「丁寧体」「普通体」「その他」の使用比率と標準偏差(括弧内の数値)を算出した結果、学習者が75.6% (12.5), 14.2% (12.0), 10.2%

(4.2), 母語話者が69.2% (10.9), 15.5% (9.0), 15.4% (4.2) だった。学習者の普通体使用比率は、母語話者とほとんど差が見られないものの、丁寧体、普通体の使用比率だけでは、学習者が母語話者と同様のスタイル運用を行っているかどうかを判断することはできない。次に、普通体から抽出されたIFの使用頻度を表2に示す。個人による差はあるものの、IFの使用比率は平均すると、学習者が14.4%、母語話者が2.2%と、学習者に多く用いられていた。IFを用いていた者は、母語話者が3名のみだったのに対し、学習者は6名であった。IFを用いていない学習者は6名いたものの、普通体の使用自体が少ない者もいるため、これらの学習者が意図的にIFを用いていないかどうか判断することは難しい。

では、学習者の用いていたIFには、母語話者とは異なる何らかの特徴が認められるだろうか。観察されたIFについて、(1)「終助詞」、(2)「(文末の)上昇音調」、(3)「疑問詞(疑問文)」の3つの観点から、それぞれが何回使われているかを調べた。表3, 4にその結果を示す。なお、L07, L08, L14は上昇音調と疑問詞両方に該当する発話の一つずつ、会話No.03のJ01は終助詞と上昇音調両方に該当する発話の一つあったため、両方の欄に加算した。以下、学習者のIF使用を3つのタイプ別に、事例を取り上げつつ論じる。

5.2 タイプ別IFの分析

5.2.1 終助詞

普通体に終助詞が付加されたIFを用いていた者は、学習者が4名、母語話者が1名であった。学習者に観察された7発話の内、6発話は形容詞であった。また、7発話の内、付加されていた終助詞は6発話が「ね」、1発話が「よ」であった。以下は、形容詞に「ね」が付加されていた例である。

表2 IF/IPの使用頻

会話 No.		01	02	03	04	05	06	07	08	10	11	12	14	平均	
学習者	IF	回	3	0	0	1	0	0	9	15	1	0	0	12	3.4
		%	33.3	0	0	4.5	0	0	10.6	18.3	11.1	0	0	48.0	14.4
	IP	回	6	3	5	21	10	13	69	67	8	8	13	13	20.3
		%	66.7	100	100	95.5	100	100	89.4	81.7	88.9	100	100	52.0	85.6
母語話者	IF	回	0	0	1	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0.5
		%	0	0	6.7	0	5.6	6.2	0	0	0	0	0	0	2.2
	IP	回	17	11	13	6	17	57	32	27	18	15	15	30	21.9
		%	100	100	93.3	100	94.4	93.8	100	100	100	93.7	100	100	97.8

表3 IFのタイプ別使用回数(学習者)

会話 No.	学習者	終助詞	上昇音調	疑問詞
01	L01	3		
02	L02			
03	L03			
04	L04	1		
05	L05			
06	L06			
07	L07	2	1	7
08	L08	1	14	1
10	L10			1
11	L11			
12	L12			
14	L14		1	12
合計		7	16	21

表4 IFのタイプ別使用回数(母語話者)

会話 No.	学習者	終助詞	上昇音調	疑問詞
01	J01			
02	J02			
03	J01	1	1	
04	J03			
05	J04		1	
06	J05		4	1
07	J06			
08	J07			
10	J09			
11	J06			
12	J10			
14	J11			
合計		1	6	1

例(4) 会話 No.01⁽⁴⁾

- 01 L01: 大阪のひ、人はあの、そのイメージが
 02 みんな明るくて(んーんーんーんーん
 03 ーんー)あの優しいなイメージ、はい。
 04 J01: [そうですね。
 05 L01: [はいはい。

- 06 J01: あの、おばちゃんが(はい)、あのよ
 07 く飴玉をくれるっていう。
 08→L01: あーいいね<笑>。
 09 J01: よく言います(はい)<笑>。

06-07行目でJ01が、大阪のおばちゃんはよく飴玉をくれると言ったことに対して、08行目でL01は笑いながら「あーいいね」と言っている。

このような、即時的な感情表出を行う際に普通体へのシフトが起こる傾向のあることは、母語話者を対象とした研究でも多く報告されている(井出・生田, 1983; Okamoto, 1999, 等)。しかし、その場合に用いられる形式は主に裸の普通体であり、聞き手に直接当てられたものではない。「ね」「よ」は聞き手への情意を表すことから(Cook, 2002)、これらの終助詞が付加された場合、聞き手目当ての普通体発話となってしまう。母語話者同士による丁寧体基調の会話では、普通体に「ね」「よ」が付加された形はほとんど用いられないことから(伊集院, 2004)、この場合の「ね」「よ」の使用は、唐突で失礼な印象を与えてしまいかねないと思われる。

McMeekin (2014)では、学習者の普通体使用は、裸の形式から、終助詞「ね」の付加をはじめとする複雑な形へと発達していくことが示唆されている。学習者が母語話者同様に、裸の普通体でのシフトを行えるようになったとしても、IF/IPの区別を理解していない場合、レベルが上がってから終助詞「ね」「よ」を付加するようになる場合も考えられよう。

5.2.2 上昇音調

「ね」「よ」といった終助詞と同じく、上昇音調も聞き手への情意を前景化させる(Cook, 2002)。本研究では、明確に聞き手に向けられていると認められる疑問文のみをIFと認定した。その結果、学習者3名(L07, L08, L14)に観察された。L08は一人で14回を占めていたが、その内11回は、以下のような「ほんと?」という発話で占められていた。

例(5) 会話 No.08

- 01 L08: 【前略】なんか外国とか行ったこと
 02 [ありますか。
 03 J07: [あ、僕ですね、あの、ほんとに小学
 04 校4年生の時に(んー)、親に連れら
 05 れて、ハワイに行ったぐらいで、(ん
 06 ー)あと行ったことないんですよ僕外
 07 国に。
 08→L08: ほんと?
 09 J07: はい。

03-07行目でJ07が、小学校のときの家族旅行を除いて外国に行ったことがないと言ったことに対して、08行目でL08は「ほんと？」と普通体で驚きを表し、これに対して、J07は「はい」と応答している。L08はこの他にも、「難しい」「面白い」「かわいい」等、即時的な感情表出の際に頻繁に普通体へシフトしていた。だがそれらとは異なり、例(5)では上昇音調が用いられており、応答を求める聞き手目当ての発話となっている。感情表出を行う際の普通体へのシフトが聞き手目当ての発話として産出されているという点は、「ね」「よ」を付加する場合と共通している。

また、学習者に観察された他のパターンとして、独話的に発話することが自然な場合に、上昇音調を用いることで聞き手目当ての発話となっている場合があった。例(6)は、01行目でL07が、会話時間がどのくらい経過したかを確認しようとしているところである。

例(6) 会話 No.07

- 01→L07: ジャあ、え、どれくらい?
02 J05: あ、ほんと、もう…
03 L07: あ[とは、
04 J05: [そろそろ…
05 J05: たぶん、40分から始まったと思うの
06 で、55分くらい。

会話を収録した部屋には時計がかかっており、L07は01行目で時間を確認しようとしたものと思われる。本来は「かな」を用いるなどして、独話的に発話することが自然な発話であるが、疑問詞と文末の上昇音調の使用により、相手に尋ねるような発話となっている。このような、独話的に行うべき発話が、聞き手目当ての発話として産出されている例は他に、L14にも観察された。

一方、母語話者が普通体で上昇音調を用いるのは主に、例(3)のような確認要求や明確化要求のときであり、話し手の意識が聞き手よりも発話の情報内容に向けられている場合であった。

5.2.3 疑問詞

疑問詞疑問文の普通体発話は、母語話者には1例見られたのみだったが、学習者には4名に計21回見られた。学習者による疑問詞を用いたIFとなる普通体は、大半が、回想や適切な表現を探すときであった。例(7)は、L07が奈良を観光した際に、ある観光施設で見た映画の内容を話しているところである。

例(7) 会話 No.07

- 01 L07: あの、あの、何、印象すーに残ってる
02 のはすごく、あの印象に、残ってるの
03 は、あの、映画、が、(んー)その、
04 ま、な、人を中に座ってて、(んーん
05→ ー)周りは、あの、なに。
06 どう言ったらいいですか。
07 映画を通じて、当時は、【以下略】

05行目でL07は適切な表現を探しており、その際「なに」と発話している。L07は、会話中に6回、同様の状況で「なに」を用いており、本来であれば独話的に発話すべき内容であるが、意図せず聞き手に尋ねているかのような表現になっているものと思われる。後述するように、母語話者の場合、このような状況では、独話的発話であることを示すマーカーを用いている。回想や適切な表現を探すときの普通体での疑問詞疑問文の使用は、L07の他に、L10にも1回観察された他、L14は「なんて言(ゆ)う」を9回、「なんだった」を3回用いていた。その一例を示す。

例(8) 会話 No.14

- 01 L14: いろいろな面から言われているん
02 な、ところを調整しないと分から(は
03→ い)、まあ、なんて言う。
04 まあ、何回も何回もおんなじこと言
05 われて何回もそれを、答えるように
06 ならない(はあ)と、もうマスター
07→ の時も結構、なんて言う。【以下略】

L14は、自身が所属する専門領域における研究の厳しさを語っている。この例のように、L14は会話中、回想や適切な表現を探す際に「なんて言う」という表現を頻繁に使っていた。このような表現は、独話的発話であると理解されるための特徴を有していないため、聞き手目当ての発話として聞かれかねないだろう。

以下は、独話的発話を用いている母語話者の例である。イギリスに留学したことのあるJ06が、現地での朝食の様子を語っている。

例(9) 会話 No.12

- 01 J06: でこう、パンも、えーとフランスパン、
02 とかだけじゃなくて(はい)いろいろ
03 あるじゃないですか。
04 L13: そう[ですね。
05→J06: [あと、ちよっ、なんだろう。
06→J06: 大麦、とかなのかな。

07 L13: はい。

08 J06: とか、ちょっとしたいろんな【以下略】

05, 06行目でJ06は普通体へシフトしているが、「だろう」「かな」と、独話的発話であることを示すマーカーを用いているため、明らかに聞き手ではなく、自身に当てられた発話となっている。このように、回想や適切な表現を探すときのスタイルは普通体を用いるのが自然であるが、独話的に発話しなければ聞き手目当ての発話であるIFとなってしまうかねない。

6. まとめと考察

本研究では、丁寧体基調の初対面会話に現れる普通体へのシフトのうち、IFに焦点を当て、JSL上級学習者の使用実態を調査した。

まず学習者、母語話者のスタイル使用比率を比較した結果、普通体の使用率において学習者に母語話者との差はさほど見られなかった。だが、普通体におけるIFの使用率は、学習者が母語話者を大きく上回っていた。さらに詳しく調べるため、使用されたIFを対象に、聞き手目当ての終助詞、上昇音調、疑問詞疑問文の使用という3つの観点から分析を行った。その結果、即時的な感情表出を行う際に、「ね」「よ」、或いは上昇音調を用いることで、IFとなっている事例(例4, 5)、本来独話的に発話することが自然な発話において、上昇音調を用いたり、独話的発話のマーカーを用いなかったりすることで、IFとなっている事例(例6, 7, 8)が観察された。これらIFが使用された発話環境は、即時的な感情表出における発話、及び独話的発話という、本来聞き手に当てる必要のないタイプの発話であるという点で共通している。

即時的な感情表出における普通体へのシフトについては、母語話者が頻繁に行うものであり、また、本データの学習者にも多く見られた。だが、この場合の普通体は、通常IPであるがゆえに丁寧体基調の会話でも用いられるものである。学習者はIF/IPがはっきりと区別できていなければ、この場合の普通体使用を許容されるものと考え、IFを用いてしまうことが考えられる。

独話的発話については、本来独話的に行うべき発話だが、意図せず聞き手目当て性をもち、IFとして理解されかねない普通体発話となりうることを示している。

学習者は普通体使用全体から見れば、およそ85%の発話でIPを用いていたため、日本での生活を通して、IF/IPの区別を学んでいくものと思われる。しかし、

本研究で示したような不適切なIF使用となる場合も一部で見られた。IF/IP使用の意図と発話が適切に結びついていないものと思われる。この点の理解を促すために、日本語指導に当たる者は、同じシフトされる普通体発話であっても、「ね」「よ」などの終助詞の付加や、情報要求などにおける上昇音調、疑問詞の使用によって、聞き手目当て性をもち、失礼な発話として聞かれやすいことを意識させる必要がある。その上で、普通体が聞き手目当てでない発話として聞かれるための言い方を学ぶことも有効であろう。

先行研究では、学習者による普通体へのシフトを扱ったものは多いが、IF/IPを区別した上で、JSL上級学習者による普通体使用を見たものはなかった。本研究では、シフトされる普通体をIF/IPに分け、両者を区別することがコミュニケーション上重要であることを主張した上で、学習者による不適切なIF使用のパターンを分析、考察した。

7. 今後の課題

本研究ではIFの使用を、失礼になるリスクの高い発話として、学習者の使用実態を観察した。普通体を用いられていた発話のおよそ85%はIPであったが、普通体の使用率自体が低い学習者もあり、学習者がどの程度IF/IPを使い分けているかについての判断は難しい。この点を明らかにするためには、学習者による普通体基調の会話など、学習者のさまざまな普通体使用を引き出せるような、異なるタイプの会話を観察する必要がある。

さらに、IF/IPを区別することは、母語話者が普通体を用いた際のメタメッセージを理解できるかどうかにもかかわってくる。それは、母語話者が行った普通体へのシフトが、心理的距離の短縮を意味する普通体なのか、そうでないのかを判別することが困難となるためである。今後、会話観察以外の方法も用い、検討していきたい。

【注】

- (1) テスターと一対一の対話を行うことにより、口頭での日本語能力を測定するテストである。
- (2) ここでの「独話的発話」は、増田(2010)における「話し手志向」の発話を指す。
- (3) 本稿ではIPの分析は行わないため、便宜上、IFに該当しない普通体発話をIPとした。
- (4) 会話例に用いた記号について、“[”は両話者による発話の重複が開始された地点であることを、発

話中の“()”は、聞き手の相づちであることを、
“【 】”は注記であることを表す。

【参考文献】

- Caltabiano, Y. M. (2008). Consequences of shifting styles in Japanese: L2 Style-shifting and L1 listeners' attitudes. In Bowles, M., Foote, R., Perpifian, S., & Bhatt, R. (Eds.), *Selected Proceedings of the 2007 Second Language Research Forum*, 131-143.
- Cook, H. M. (2001). Why can't learners of Japanese as a foreign language distinguish polite from impolite speech styles? In Rose, K. R., & Kasper, G. (Eds.), *Pragmatics in Language Teaching*, 80-102. New York: Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, (Vol. 10, pp. 150-163). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Cook, H. M. (2008a). *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a foreign language*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cook, H. M. (2008b). Style shifts in Japanese academic consultation. In Kimberly, J., & Ono, T. (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 9-38. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ikuta, S. (2008). Speech style shift as an interactional discourse strategy: The use and non-use of *desu/masu* in Japanese conversational interviews. In Kimberly, J., & Ono, T. (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 71-90. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Iwasaki, N. (2008). L2 Japanese acquisition of the pragmatics of requests during a short-term study abroad. *Japanese Language Education in Europe*, 12, 51-58.
- Iwasaki, N. (2010). Style shifts among Japanese learners before and after study abroad in Japan: Becoming active social agents in Japanese. *Applied Linguistics*, 31, 45-71.
- Makino, S. (2002). When does communication turn mentally inward?: A case study of Japanese formal-to-informal switching. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, (Vol. 10, pp. 121-135). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Marriott, H. (1995). The acquisition of politeness patterns by exchange students in Japan. Freed, B. F. (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context*. John Benjamins Publishing, 197-224.
- Maynard, S. K. (1991). Pragmatics of discourse modality: A case of *da* and *desu/masu* forms in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 15, 551-582.
- McMeekin, A. (2006). Negotiation in a Japanese study abroad setting. In DuFon, M. A., & Churchill, E. (Eds.), *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Multilingual Matters, 177-202.
- McMeekin, A. (2014). Japanese learners' indexical uses of the *da* style in a study abroad setting. *Japanese Language and Literature*, 48, 1-38.
- Megumi, M. (2002). The switching between *desu/masu* form and plain form: From the perspective of turn construction. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, (Vol. 10, pp. 206-219). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Okamoto, S. (1999). Situated politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9, 51-74.
- Saito, J. (2010). Subordinates' use of Japanese plain forms: An examination of superior-subordinate interactions in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 42, 3271-3282.
- 生田少子・井出祥子 (1983). 社会言語学における談話研究 言語, 12, 77-84.
- 伊集院郁子 (2004). 母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け: 母語場面と接触場面の相違 社会言語科学, 6(2), 12-26.
- 今村圭介 (2014). 日本語学習者に対するスピーチスタイル教育に向けた実態研究 博士学位論文, 首都大学東京
- 宇佐美まゆみ (1995). 談話レベルから見た敬語使用: スピーチレベルシフト生起の条件と機能 学苑, 662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (2001). 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能: 敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること 語学研究所論集, 6, 1-29.
- 白川博之 (2009). 「言いさし文」の研究 くろしお出版
- 申媛善 (2007). 日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み: 時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して 日本語科学, 22, 173-195.
- 申媛善 (2009). 韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用: 時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して 日本語教育, 140, 81-91.
- 陳文敏 (2003). 同年代の初対面同士による会話に見ら

- れる「ダ体発話」へのシフト：生起しやすい状況とその頻度をめぐって 日本語科学, 14, 7-28.
- ナズキアンフミコ (2007). インタビュー談話における常体の機能 南雅彦 (編), 言語学と日本語教育V, 141-155. くろしお出版
- 増田恭子 (2010). 日本語学習者の文体シフトについて：学生と教師との会話からの一考察 南雅彦 (編), 言語学と日本語教育IV, 191-212. くろしお出版
- 三牧陽子 (1993). 談話の展開標識としての待遇レベル・シフト 大阪教育大学紀要 I: 人文科学, 42(1), 39-51.
- 三牧陽子 (1997). 対談におけるFTA 補償ストラテジー：待遇レベルシフトを中心に 多文化社会と留学生交流, 1, 59-77.
- 三牧陽子 (2000). 丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出：「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして 多文化社会と留学生交流, 4, 37-53.
- 三牧陽子 (2002). 待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示：初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に 社会言語科学, 5(1), 56-74.
- 三牧陽子 (2007). 文体差と日本語教育 日本語教育, 134, 58-67.